
スゴク好きだった....。

華恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スゴク好きだった…。

【Nコード】

N5447A

【作者名】

華恋

【あらすじ】

これは実際にあったモノです！けれど登場人物とは全く関係ないものデス。高校最後の年に、いろんな経験をした女の子の甘くって辛かった子の話デス。

アナタとアタシとの出会い（前書き）

初めて書くので心配ですが読んで下さい
ミ

アナタとアタシとの出会い

ねえ…。アタシは夢をみてるのカナ？こんなコトが起こるなんてアタシは思いもしなかったんだよ。

アタシ（中川奈美）は、もういつの間にか高校3年になってた…。本当にアタシは、まあうるさいケドごく普通の生徒だと思う。別にハッキリ言って美人じゃないしスタイルも良くない…。だからアナタとこんな風に近づいてくなんて。今から思い返してみてもアナタはアタシにとって遠い人だと思う。

それは入学して間もなかったケド髪を茶色にして制服を自分なりに着こなしているアナタが居た。

まあ…。都立高校だから当たり前だけど、その時は誰よりも、それが似合って居て凄いオシャレな子で格好良いなあ…。って思った！それからアナタの事は、隣のクラスだから、よく見かけたし…。何よりアナタは学校で目立つグループに居たから、きっと誰もが知ってたと思うんだ。でも学校の問題児のグループだけどアタシは嫌いじゃない。だって話せば皆、良い子だし気さくに話してくれる人ばっかだった。けれどアタシとアナタは全く接点は無かったから話さなかったね…。うん。それはアタシにとってアナタは、何だかスゴク遠い人に思えてならなかった人だったと思うんだ。スゴク…スゴク…

同じクラス

アタシの高校生活は、中学の時に思い描いた派手なもの wasn't ケド毎日が楽しかった。

『奈美いゝ！ 帰ろう！』 そう言つて近づいたのは親友の佐藤香奈だった。 香奈とは3年になつて仲良くなつた。 クラスのグループは6人だケド香奈とは特に仲良かった。 香奈は漢字とか難しい言葉が苦手でボケボケしてるケド誰よりも優しくつてアタシの変化に気付いてくれる子だった。 アタシとゆくと、まあ。 何とゆうか結構ハツキリものを言うタイプでギャルみたいに目立つんじゃないやつて皆と騒ぐのが好き！ って感じだった。

香奈とマツクで寄り道をした…。 そしてアタシ達は、この年頃の子の話をした。 『奈美い！。 イイ加減彼氏が欲しい！』

『アタシもだよー！』 ってな話をしてたケド実際、香奈はアタシが見ても可愛いと思う。 でもアタシと似てバカキャラで妄想族だった（笑） だから出来ないのカナ。 って思つてたら香奈が『でも今回のクラス結構、格好良い人とか居るよね！』 って言つてきた。 『確かに… 楽しくはなりそうだね！』

『奈美は誰が格好良いと思う？』 アタシは、ちよつと考えて… 『戸川隆カナ…。 でも、まあー 住む世界が違うからね！』

『アタシもそう思う！ 戸川君なんかガラ悪そうなグループに居るケドそこまで騒がずクールぽいキャラだね！ っでオシヤレさんだよね』 戸川君は首席番号順でアタシの前の席だった。 いつも音楽聞いちゃってばかりで女の子とは話さない人だった。 いつも… また寝てるし って思う程度の人だった。

コピー

今、アタシと香奈は放課後の教室でノートを見せ合ってた！そう…
3年初の中間テスト前が近づいてる。

考えるだけでも頭が痛い。

でもアタシは英語以外ならノートはとっていたので香奈にノートを
見せてあげてた。

アタシは同じグループで学年でも頭が良いメグに英語を教えてもら
ってた…。

『メグ〜。駄目っっ！アタシ英語はマジ出来ない！ノートは写せな
いからコピーさせて！』メグは 嫌な顔せず『いいよ！でも絶対勉
強するんだよー？』『わぁーい！メグ大好き』そして香奈も『アタ
シも奈美とメグのコピーさせてえー！』って叫んだ。アタシは笑い
ながら『嫌じゃ！』って言った。香奈は『ええ〜？ヒドイ！』って
言いながら笑ってた。そしてアタシ達は帰り際にコンビ二によつて
てコピーしに行った！そしたらコンビ二の前にはタツチャンが居た
！タツチャンは目立つグループの一人だけど癒し系キャラで2年か
ら同じクラスで仲良かった！

『タツチャン！やつぱタツチャンもコピー？』『おう！でも、ナツ
チャンもだろ？ちゃんとノートとれよ！笑』アタシはチラッて横を
見た…。戸川君が居た。でも気にせずタツチャンと話した。『失礼
な！コピーするのは英語だけダヨ！あとは完璧だもん』そしてタツ
チャンは目をこれでもかっ！ってくらい見開き『マジっ？ナツチャ
ン！コピーさせて！奈美様お願い！』アタシと香奈とメグは大爆笑
した！

そしてイキナリ横から戸川君が『俺も良いかな？』って言ってきた。
ビックリした。別に断る理由もないのでOKした。たぶん話したの
は初めてだった。あまりアタシは人とは壁は作らないケド、アナタ
は違った。壁じゃないケド…周りとは違う雰囲気を持ったアナタが

アタシをおじけさせたんだと思う。

イキナリのメール

香奈とメグと、その場を離れ：振り返るとタッチちゃんは手をブンブンと振り戸川君はペコリと頭を下げていた。

しばらく歩いた後：3人は『ビツクリしたあー』って声を揃えた！アタシは何食わぬ顔をしてたケド心臓がバクバクいつてた。

それは恋とはまだ違う：触れてはいけないモノに触れてしまった感じだった。でもただ、それだけの関係だって分かってた！だってアナタには可愛い先輩の彼女がいるんだもん。それでも、やっぱり普通の友達になりたいって思うのは欲張りですか？

アタシの中でスゴク遠い人は相変わらず遠いケド何だか目を離せない存在になったのはコレがキツカケかもしれない。

その日、タッチちゃんからメールが来た。『ナツちゃん！ノート有難う。隆も言^{リュウ}つてた』って入った。少し、メールをして、寝ようとしたら知らないアドレスからメールがきた。

『こんばんはあー！アドレス鈴木から聞いちゃいました！…』鈴木つてのは同じ高校の男で幼なじみだ…。つで内容の続きは『…ノートありがとう！戸川隆でしたあー！』『エッ？』『アタシはかなりビツクリした！メールでさえ驚きなのに何コレ？何でこの人…弾けるの？』って思った。そしてアタシは何だか可笑しくって笑った。お母さんがそれを見て『気持ち悪い』って言った。アタシは、ちよつと考えてから返事を送った。

『さっきタッチちゃんから戸川君の分のお礼を言われたよ！なのに、わざわざメール有難うね』

そしたら直ぐに返事がきた。

『達也にアドレス聞いたら俺が送るから良いって言われたから鈴木に聞いたんだ！迷惑だったらゴメン！』って入ってきた。たぶんタッチちゃんはアタシが誰とでも仲良くなれるのに戸川君と壁を作ってるから苦手なんだろうと思って気を利かせてくれたんだと思う。そ

してアタシ達のメールは、この日を境に始まったんだよね。

指輪

次の朝：ゆっくりと目が覚めた。さてさて もう1度、携帯のメール画面をしてみる。やっぱり知らないアドレス戸川君からメールがきていた。。。

『やっぱ夢じゃなかったんだ…』

『ハッ？何言ってるの？奈美っ学校遅れるよ？また遅刻する気なの？』お姉ちゃんの声でハッすると学校の準備をした。けれどやっぱり遅刻をしてしまい…先生に『奈美ー！またかあ？』って言われ『まあまあ。今度デートするから許して！』って言ってペロツと舌を出して誤魔化した！周りも笑ったので場は和み怒られずに席につけた。前の席は相変わらず眠ってた…。アタシ本当にアナタとメルしてたあ？不思議でたまらない。だって実際アナタはクラスでもタツチャンしかあまり話さない…。正直言って、アナタからは近寄んなオーラが出てると思う。

でもアタシは別に嫌いじゃない。まあ好きでもないけど…。だけどココは女子高生！心の奥でミーハーなアタシは、友達になれるならなりたいな…って思ってた。これは誰にも言えなかった。本当に好きとは違うケド気になる存在…。恥ずかしかったんだと思う。ずるいアタシが居た…。

けれどコレだけは好きだなあ…。って言えるのがあった。アナタの左手には指輪が光ってた…。そう 先輩とお揃いの。確か長かった気がする。だから好感が持てたのかな？何かあまり女の子と話さないアナタが彼女を大切にしてるんだなあ…。って思ってた。良いなっと思った！アタシにとって憧れるカップルだったんだよね…。

変わらない距離

休み時間になった…相変わらずアナタは寝てる。何しに学校に来てるのかなあ…。ってボンヤリと考えてたら香奈・メグ・花・由美・美香がやって来た。仲良しグループだった。

『奈美いー。次、移動だよ？早く準備して！』

『はいはい…。香奈は忘れ物してないの？』って言いアタシはアナタが気になった…。香奈達が少し歩き始めていた。そして起こしてあげるべきか否か…。だけど、やっぱ起こしてあげないとね。『戸川君…ねえ戸川君ってば！』…っ…！…エツ？中川サン何？』すんごいビックリしてるし。アタシは可笑しくって笑った…。それを見てアナタも少しだけ笑った…。『次、移動だよ。迷惑だったかもしれないケド起こしちゃった！じゃバイバイ』

そして直ぐアタシは香奈達のトコに向かった。後ろからあまり大きくはないケド『有難う…』って聞こえた。アタシは振り返って手で丸めてして笑った…。香奈達は、ビックリしてた。『よく戸川君、起こせたね！しかも話せてるし！』香奈にも、何となく戸川君とメルしたのと言えなかった。

『うん…この前、ノート貸したし何となくね。戸川君は、あのグループでも特に何だか近寄んなオーラ出てたケド意外にそうじゃなかったみたいだし！』でもアタシは、まだアナタとこんなにも近くになれるとは思ってなかったんだよ…。別に昨日のメールしたからってアタシ達の関係は変わるもんじゃなかった。だって住む世界が違う気がしてならなかったから！学校に居ても話す内容ないし…。まあ話さなくても今までと変わらないって思ってた。

でも何でかアナタの違う一面が見れた気がして興味が出てきた。それでもアタシ達は別に廊下をすれ違っても、お互いの友達と話していて目も合わせなかった。やっぱり何だか遠い存在な気がしてなかった。少し距離が近づいた気がしたケドやっぱりそれは、違

うんだって思えたら淋しかったんだよ…。アタシは何て勝手なんだろうね。ねえ戸川君…本当のアナタは、どんな人ですか？

ギャップ

この日は、真つすぐ家に帰った。もうすぐ中間テストだから嫌々、仕方なく勉強をする事にした。

間もなくして携帯が鳴った。アタシはきつと香奈からだろうって思ってた。それは、予想もしてないアナタからのメールだった。

『こんちわぁー！意味もなく甘栗むいちゃいました。戸川でえーす！』

『ハッ?!...何これ?意味不明なんだケド?』

アタシは頭の中が真つ白になってしまったんだよ!だってアナタがこんなメールをするなんて思ってもなかった。とりあえず簡単に返事を送った。

『ってかウケる!笑』

ちよつとしてから、またメールがきた。

『ねえ知ってる?ガチャピ*とムツ*の秘密!』

んな事、知らないし...。本当に笑えた。アタシは今までのアナタの印象をブチ壊さなければいけないみたい。だけど、それは...きつと周りもそうだと思う。あまり誰とでも話さないアナタ...近寄りたいアナタ...。誰もが今のアナタを想像は出来ないよ。そんなアナタのギャップにアタシは今、ハマッてしまったんだと思う。

その後も少しメールのやりとりをしてから勉強を再開した。けれど全く集中できなかつたんだよ...。何度も何度も携帯の受信画面をみてしまったから...

だけど次の日からアタシは、アナタにノートを貸した手前、悪い点数がとりたくなかつたから一生懸命勉強をした。おかげで、いつもより成績が良かった!(笑)

アタシは勇気を出して学校で話を掛けた。

『ねえ戸川君:テスト出来た?ノート分かりづらかった?』アナタは申し訳なさそうな顔をしてアタシを見たよね!『ノートは見やす

かつたんすが俺が馬鹿だから赤点ギリギリツス！中川サンに申し訳ないツス』だって…。でも、どうやらいつもよりは良い結果だったみたいなので安心した…。ってかギリギリもどうかと思うけど少しでも役に立てたなら良かったって思えた。

消えたもの

中間テストが終わってアタシ達は、そこまでメールはしなくなったケド相変わらずアナタからのメールは、くだらなくって笑えた…。でも学校ではあまり話さなかった。だから今だに、本当にアナタとメールしてるのか分からなかった…。実は違う人なんじゃないかって疑ってしまうアタシが居た。

そして…しばらくしてアタシは気付いてしまった。相変わらず朝から学校に来て寝てるアナタの左手から消えてるものがあるって事を…。けれど、まあ…ただ単に忘れてきたのかもしれないしアタシは聞かなかった。それを聞いて、どうこうしようとも思わなかった。それにアタシはアナタと先輩カップルが理想だったから。上手く言えないケド複雑な気持ちでいっぱいだった…。

…自分の気持ちがいらないって変ですか？それとも、今のアタシがお子様だからなのかなあ？きつとアタシくらいの子は、みんな自分の気持ちをそれなりに理解してるんだろうね…。

何日かして携帯が鳴った…。いつもと違ったのはアナタからのメールじゃなくって電話だった。正直アタシは電話があまり好きじゃなかった。気心知れた子なら平気だけど電話は何だか緊張をしてみうから…。このまま気付かなかった事にしようと思ってたケドあまりにも長く鳴り続けるのでアタシは重い手を伸ばして電話に出た。

『…はい』

『…っ…』

『…もしもし？』

『戸川ですケド今、平気ですか？』

『うん。平気だよ！どうしたの？元氣ないね…』

あの時アタシは、流れのまま、そう聞いたケドあまり聞きたくなかった気がする。

『実は 彼女と別れたんだよね』

……。アタシの頭が、ぐらんと揺れた。スゴク鈍く……。何だか気持ちが悪かったのは今でも覚えてる。

やっぱり聞くんじゃないかった……。言葉をなくした。

『もしもし?』

アナタからの声で止まっていた思考回路は再び動き出した。『エッ? あっ……。ごめん。大丈夫なの?』

『うん。まあ最近そんな感じだったんだ。それに、あっち何度か浮気もしてたんですよ……』

『そうなんだ……』

『結局、俺ふられちゃったみたいですよ』

『戸川君は それで良いの? 今なら間に合うかもよ?』

『……はい。へこむけど仕方ないツス』

『何て言ったら良いのか分からないけど元気だしてね! アタシ話だけなら聞けるよ……』

知らなかった……アタシから見たアナタ達は本当に素敵なカップルだったから。。

言えないんだよ。

次の日、香奈がアタシのトコに来た。

『戸川君：やっぱり別れたんだって！』

『あつ：うん。そうみたいだね』

『エツ？知ってたの？なあーんだ！つまんないのお』

・・・。

『でもさあ。奈美はショックなんじゃない？あの二人いいなあ。つて言つてたじゃん？』

『うん：ショックだったし複雑だった』

『だけどウチらも早く春が来て欲しいねえ』

『つてか後、2カ月くらいで夏だし！』

『ちつがーう！そうゆう意味じゃないし！笑』

『はいはい！分かつてるから』

そんな話をずつとしてた。アタシも彼は、ずっと居なかったし、それに高校生活最後の年だから今年の夏こそは花火大会とか行きたいって思ってた。

今年は誰かに行けるのかなあ。つてボンヤリと考えてた。そして香奈が、『そういえば奈美って最近：戸川君と仲良いよね！』心臓が飛び上がる位：ビックリした。アタシは平静を装い言った。

『別に普通じゃない？必要以上話さないケド』

『でも他の子なんて全く話さないじゃん！良いなあ』

『つてかタッチヤンとかのが仲良いし！香奈も話掛けてみたら？意外と普通かもよ！』

『エツ？無理！怖いじゃん。だけど奈美との何か違う気がするだよね』

『変わらないよ！』

『ねえ奈美：何かあった？』

アタシは、いろんな感情が入り交じってイライラした！

『別に何もなし!』

『そうなんだあ?』

…うん。本当に何もなし。むしろ他の男の子のが仲良いしアタシはアナタの事、全く知らない。だからアナタの事ペラペラと他に話せない。話せる立場じゃない…。話せる立場じゃないんだよ? だって別にアタシとアナタの関係は何も変わらないじゃない?

微妙な距離

それからアナタから毎日、メールがきた…。内容は、いつもくだらなかつた気がするケド楽しかった。

そしてアナタの新しい発見をすると純粹に嬉しかった！そしてアナタはバンドを組ん出てボーカルをしてるって…。メールだと二人とも何でも話せたね？！本当に新しいアナタを見つけたたび嬉しかった…。

アナタは自分のコトを一生懸命アタシに教えてくれたね！でもアタシはダメな奴なんだ。

アナタのコトは、いーっぱい知りたいつて思ってるのに知り過ぎるのが恐かつたんだ。アナタしか目に入らない気がしてきて。。。だから反対に学校じゃ話さなかつたのは、せめてもの救いだつたかもしれない…。ケド少し目が合うとお互い微妙に笑い合ったね！アタシは胸が苦しかったケド何だか温かい気持ちになつてた…。アタシ達の微妙な距離感…

アナタの本当の気持ちは何ですか？

近づくアナタ…距離をとろうとするアタシ…

本当にアナタが分からなくつてアタシは自分自身からアナタ自身から逃げてた。

そんなアタシはダメな奴です…ずるい奴なんです。

だけどアナタから見たアタシは、どんな風に見えたの？神様…アタシは臆病な奴なんです。目で彼を追つてしまふ自分を認めたくなかつた…。誰かに話してしまつたら、もう止められないと思つた。アナタに近づきたいケド近づけないアタシ…。こんな住む世界が違うアタシがアナタに近づいちゃいけないと思つてたの。。。バカだと思つたろうケドこれが当たり前だと思つてた。

ゆっくり

『奈美いゝ。もうヤダ！！つい、この前も中間だったのに、もう期末だよ？有り得くない？』

『本当だよ！超ーヤダああ！別に、こんな方程式とか今後の人生に必要なし…』

あゝ。ヤダ！何でこんなに毎回テストしなきゃいけないだろう？順位も発表されて…別に出来が悪かったってダメな人間なんて居ないじゃない！むしろ、よくニュースとかでも真面目な人が犯罪を犯してるってコトをよく目にする…。

分かってる！こんな風に思ってる自分は今、この現状から目を背けてるってコトも…。でも学校に居るガラの悪い人達もハメは外し過ぎちゃうかもしれないケド皆…良い人達なんだよ？それを大人達は認めない！おかしいよ…。何でもっと一人・一人を見てあげられないだろう。それは前から思ってたコトだけどアナタを知ってから余計そう思うようになってた。

そして期末が近づくにつれて、やっぱりアナタが学校でも近づいてきた…。でもスゴク戸惑った感じだったね。まあ…。仕方ないカア！アタシ達6人グループが居る中を勇気出して来たんだもんね。アタシはアナタのその姿が可愛くって嬉しかった。

『あの…中川サン申し訳ないんだケドまたノート貸してくれませんか？』

『…（笑）…ハイ！こんなノートで良ければ！』

『有難う！じゃ中川サンが平気になったら貸して下さい！』

『うん』

そしてアナタは満面な笑みをしてくれた。アタシの胸は、いっぱいになったんだよ。。。

『ちよっ…ちよつと奈美？何？今の戸川君だよ？あのクールな！でも今、可愛かったんだケド！』

メグが言った：「そしてみんなもビックリしてた。そんな中、香奈だけが何もなかったように勉強してた…。」

その帰り香奈と二人で帰った

「ねえ奈美？もうそろそろ話してくれてもいいんじゃない？」

香奈が何を言いたいか分かった…。だけどまだハッキリと自分の気持ちに分からなかったし分かりたくなかった…。けれど香奈は特別な存在だったから、戸川君とメールをしてるってコトを話した。

「じゃ奈美は戸川君のコトどう思ってるの？」

「分からない…。今は正直、分かりたくないんだ。でも目で追ってしまうのは確か…」

「うん…そっかぁー。分かった」

「戸川君だって、ただ前後の席だから言ってくるだけだと思うし」

「うーん。それは違うと思うよ！でも話してくれて有難う。また何かあったら聞くから！」

「ずっと黙っててゴメン」

「別に良いよー！奈美もゆっくりで良いから、自分の答えを見つけな」

香奈はアタシに、そう言って優しく見守ってくれた。

香奈…有難う。アタシはアタシなり焦らず答えを出していきたい。恋に臆病なアタシの精一杯…頑張るから。

ナツチャン

期末も無事に終わって球技大会が始まった…。アタシはバスケット部だったから、もちろんバスケを選んだ。そしてアナタも中学の時バスケをやってたから同じだったね…。

試合前、アナタとすれ違った時アタシは勇気を出して『頑張って！』って言おうしたんだよ。だけどアナタと目が合った時スゴク緊張しちゃったし周りも、いっぱい居たから言えなかった…。何よりナツチャンが凄いテンションでアタシ達は、苦笑いしちゃったね。『ナツチャン！まじ俺ら勝つから応援ヨロシク！』本当〴〵女の子のハートをガツチリ掴むんで！』

『タツチャン〴〵。気合い充分じゃん！それに、そんな事しなくっても人気充分だよ！』（笑）

『マジいゝ？こりやもん格好悪いトコ見せらんねえーなー！』

『ハイハイ！分かったから。もう試合だよ！』

『本当だ！行くぞ！隆ツツ』

あつ…行っちゃった…。タツチャンは嵐のような人だなあ。

『奈美いー！男子の試合始まるよ！早くっ』

『うん！今、行く』

香奈が特等席を取って待っていてくれた…。アタシはアナタの活躍をココで応援しているよ！アナタはアタシの存在に気付いてくれるかな？ううん…。こんなに、いっぱい居るし気付かないかもね。。。試合が始まって、両チームとも引けを取らなかった…。タツチャンやアナタの活躍を見るとスゴい興奮した！普段はダルそうに受けている体育の授業なのに全然違うんだもん！（笑）

周りの女子達も超ー興奮して応援してた。でも、そんなのも真剣にプレイしてるアナタには届かないのかな？本当に良い試合でアナタがシュートを決めようとした時アタシは思わず…。

『戸川君ツ頑張っ！』

エッ…?!

一瞬アナタの目線が、こっちに向いた気がした…。ちっ 違っよね？うん。絶対、気のせいにだよ…何だか、それから試合に集中出来なかった。

夜、アナタからメールがきた。

『今日は応援有難う！嬉しかったデス』

やっぱり気のせいじゃなかったんだ…。顔が熱くなってしまった。
『聞こえたの？』

『うん。ちゃんと中川サンの声が聞こえたよ！』

『そっかぁ…何だか恥ずかしいな』

『いや！本当に嬉しかったッス！あと俺もナツチャンって呼んで良い？』

『うん！』

『じゃ、ナツチャンお休み』

『お休み！』

アナタは、ずるいです…アタシの顔は熱くなりすぎてヤバかった…。

認めたくない

昼休み、アタシと香奈はホールでお弁当を食べてた。

『香奈：何だか分からなくなってきたよ』

『エッ？何っイキナリ？』

『戸川君』

『何でえ〜？戸川君、奈美にスゴいラブ光線じゃない？それに奈美だって好きなんじゃないの？』

『いや 戸川君がアタシみたいな子スキにならないよ。やつぱり…でも戸川君の考えてるコトが分からないの』『奈美：うん分かるよ！もしアタシが奈美の立場だったらって考えると分からないよね』

…
…。

『けれど奈美あのサア〜。自分のコトは分からないケド第三者が見れば分かるってコトあるじゃない？だからアタシから見た戸川君と奈美は良い感じだよ』

香奈のこの言葉はスゴク優しくって温かくって胸に染み込…

けれど、それと同時に言いようのない不安で押し潰されそうになった。

アタシは自分に自信がない…。

取り柄なんって言ったら元気だけ…可愛くもないしスタイルも良くない。なのに、あんなオシヤレで格好良いアナタがアタシをスキなんて考えられないんだよ…。それに、つり合うハズないよ！もし、これでアタシがアナタを好きになってゲームだった。本気にした？って言われたら立ち直れないよ…。だから素直に自分の気持ちを受け入れられない…。正直 自分の気持ちは認識しているよ。けれど、それは心の奥底に閉まつてる。だって言葉に出してしまつたら、もうアタシの気持ちは止められないもの…。だから怖い。。アナタにハマッてしまう自分が本当に怖い…。バカだと思つよね！けれ

どコレはアタシの中で変な意地になってしまったの…。ちゃんとア
ナタの気持ちにハッキリ分かるまで好きとは言わない。好きだって
認めたくないって…。

応援団

アタシ達の学校は9月に体育祭がある。そして夏休み間近に応援団が募集された。

『ねえ！奈美ッもち絶対ヤルよね？』

『うん！もちろん！だって高校生活最後の体育祭だしッ』

『だよねえー。だって今まで前の先輩達が問題起こして、なかったもんね！』

そうなんだよね…。何年か前の先輩達が問題を起こして伝統的な応援団は行なわれなかったんだよね。スゴい迷惑な話だよ！だけど今年から3年生がメインで1・2年生は少人数での応援団結成が認められた。

放課後、体育館に応援希望者が集まった。アタシと香奈は職員室に用事を済ませてから体育館に入った。遅れたから、そーっと入ろうと瞬間：お決まりのように。

『おおーい！ナツチャン！ナツチャン達もやるの？』

：タツチャン。こんな後輩や大勢の前で叫ばないですよ…。しかもメツチャ立ち上がったて手を振ってるし恥ずかしいじゃん！
だけどもあゝ。いつものコトだし：仕方ないかあゝ。

『ハイハイ！そんなバカは、ほっときな！奈美・香奈どこでも良いから座って！笑』

今回、援団結成を仕切る理恵が言った。

理恵を中心に援団の内容や練習日程がいろいろ説明された。

『香奈！夏休み結構練習あるんだね！でも楽しそうッ』

『だよねえー！頑張ろう！これぞ青春だね』

『何それ！香奈マジくさいよ。いつの時代のドラマだよ？笑』

『まあまあ！良いじゃないの！それより：戸川君もやるみたいだね！』

『そつみたいだね。何だかんだ目立つ人ばかりで面白そう！楽しみ

だな』

夜：メールがきた。アナタからだ。今日、メールがくる気がしてた。
『ナツチャンも援団やるんだね！俺もやろうかな』

『えっ？やるんじゃないの？体育館に居たよね？』

『達也達が行くぞ！』って言ったから付いていったんだ。だから俺は
悩み中なんだ』

『そうなの？やれば良いのに！思い出になるし他の人達と仲良くなるよ？』

『じゃナツチャンが言うなら、やろうかな！』ってか気付いてないか
と思つてた…』

『何が？』

『全然 目が合わなかったし見てなかったから』

ドキッとした…。うん アタシはアナタと目を合わせなかったから
『あつタツチャンがスゴかったから、そこら辺あんま見れなかった
んだ！ゴメンね』

『そうなんだ？達也ハズイ奴だよね！ナツチャン慌ててて可愛かつ
たよ！笑』

エッ？可愛い…？あつ！でも落ち着け奈美！コレは可愛いでも違う
意味の可愛いだから気にしちゃダメ！！ダメなんだから！

『戸川君アタシをからかつてるでしょ！もう本当恥ずかしかったん
だから！笑』

『からかつてないよ！でも俺も、やっぱ援団やるよ！これからヨロ
シク』

『うん。ヨロシクね！お休み』

スゴいビックリした。可愛いもそうだがケドあえて見てなかったコト
気付いてたんだね…正直アタシも気付いてたアナタがアタシを見て
たコト…気付かない振りをしてました。

そして、もう1つ気が付いた。アナタの言葉遣いが変わったコト…
知らぬ間に距離は縮まってきたのかもしれない。

避けたくなかった

応援団のチームは2クラスごとだった。

だから同じクラスのアナタとは一緒だったね…。

嬉しいような気まずいような気持ちで、いっぱいだった。

本当に上手く言えないんだケドやっぱりアタシはスゴク スゴクお子サマだったんだと思う。

アナタと目が合う度にドキツとして息が詰まりそうになってた…。

変だよな？今まで、こんなコトなかったよ！昔は…昔って言っても、そんな昔じゃないケド目が合っても『あつ、目が合っちゃった…』

って思っても何となく目を逸らすコトが出来たのに今は、それすら出来なくて胸が苦しくなってしまうんだよ…。だからアタシは、パニツク寸前だった！極力見ないようにしてた…。目が合ってしまったら変に目が泳いでしまった。そんな自分が恥ずかしくて意識したくなかったんだよ…。でも、アナタのコトは、何でも知りたかった。。けれど本当に常に思ってたのはアナタがアタシに近づくにつれてアタシは苦しくなり前の方がスゴク楽しかった。って思っちゃうんだ。でも本当に避けたかった訳じゃなかった…。でも知らず知らずにアナタと距離をとろうとして結果的に避けるようになってたんだね。本当にゴメンね…。こんなアタシだったから嫌な思いをさせてしまったよね…。アタシは、こんな風に思った訳じゃないかった。でも、どうしたら良いか分からなかったんだ。呆れちゃうよね…。

朝方、携帯が鳴った

『こんな朝にメールしてゴメン！俺、ナツチャンに何か嫌なコトしちゃったかな？しちゃってたらマジでゴメン！でも勘違いなら気にしないで！…！』

違うよ…。戸川君。アタシが悪いんだよ！でも今の気持ちが言えないんだ。ゴメンね…。本当にゴメンナサイ。

アタシは返信した。

『違うよ！ただ最近、バイトやら家とかで嫌なコトあって…。だから気にしないで！何か心配させてゴメンね』

なんてアタシはズルイ奴なんなんだろう…。何で、こんななんだろう…。自分が嫌でたまらないよ。

避けたくなかった（後書き）

だいぶ間があいてしまつてスイマセンでした！これからも読んで頂けたら嬉しいデス！

お誘い

もう夏休みに入る頃も相変わらずアナタからメールが入ってきた！

『ナツチャン！もう夏だよ？俺マジで夏好きなんだ』

『アタシも好きだよ！思い出いっぱい出来るしね』

『だよね！海とか行きたくない？』

ゲツ…無理！スタイル良くないし、ましてや戸川君に見せられない…。

『水着は恥ずかしくって見せられません！笑』

『エッ？いいじゃん！行こうよ！』

『でわ、いつかね！』

そんなこんなで海やらプールやらの誘いがスゴかったけど苦しい言い訳をして乗り切っていた。

けど戸川君は、めげずに今度は違う誘いをした。

『海の日には横浜で花火大会があるから行かない？』

……。どうしよう。けど行きたいけど二人は緊張するから行けない。相手がタッチチャンとかなら気兼ねなくいけるのになあー！やっぱ無理ッ！

『戸川君ならモテるから一緒に行ってくれる人いるでしょ？アタシと行っても退屈かもよ』

『そんなコトないよ！そしたら鈴木も入れて3人で！』

んっなムチャクチャなあゝ。確かに鈴木はアタシの幼なじみで問題ないケド…。あつ　もしかして誰か女の子誘って欲しいのかな。そうだよ…。アタシなんかじゃダメなんだよ。どうしてアタシは自信が持てないんだろ。嫌な自分がある…。でも、とりあえず聞いてみよう。

『じゃ、もう一人…女の子誘う？』

『そうだね！ナツチャンも、そっちのがいいよね！』

『もし気になる子が居るなら誘うケド』

『全然だれでも平気』

どうしよう…その日、香奈はバイトだったし他の子には、まだ言える状況じゃないし…。ましてやアナタのコトを好きになりそうで不安だよ…。何か今のアタシはスゴい嫌だ…。まともに友達も信じられなくて…。けれど、それくらいアナタは素敵だったんだよ…。

しばらく考えてアタシは今とは違うクラスだけど1・2年、同じクラスで仲良かった歩を誘うコトにした！歩なら安心だし誰とでも気軽に話せるし何より信頼しきっていた。

歩

アタシは歩に電話した…。

『もしもし歩？イキナリなんだケド海の日に戸川君と鈴木の4人で花火大会行かない？』

『エッ？行きたい！』

『良かった！じゃ約束ね！あと周りには、あまり言わないで！何かうるさそうだから』

『分かった！でも奈美い…何でこのメンバーなの？』

やっぱり…そこにくるよね。困ったなあ…。

『うん 実は戸川君に最近、誘われるコトが多くって今回もそんな感じ！』

『もしかして奈美と戸川君って付き合ってるの？マジ？』

ああ…。歩の暴走が始まったし…でも歩は信用出来るし何も知らないから言わないとダメだよな。

『違うよ。たぶん友達としてだと思う…』

『そうなの？でも戸川君は、あまり女子とも話さないし、そんな人には見えないケド…』

『まあ 良いじゃん！うん。あんま良くないか…』

『…ぶつ…何ッー人突っ込みしてんの？』（笑）

『歩いゝ。明日さあ家に行っても良い？いろいろ話したいし歩の家にも久々に行きたいからサッ』

『うん！別にイイヨ！じゃ明日、一緒に帰ろっ』

『じゃまた明日ね！オヤスミ ミ』

『うん オヤスミ』

…歩に上手く説明出来るかな…？でもちゃんと話せば分かってくれるよね…。でも、また誰かに話すコトで自分の気持ちが大きくなっちゃうのが怖いよ！

次の日、歩の家に行って 今までの経緯やアタシ自身の気持ちを伝えた。歩は、そうゆう話にはスゴい落ち着いて聞いてくれるし歩の考えもすっかり言ってくれる子だった。本当に何だか上手く言えないケド本当に違う雰囲気を持つ子だった。歩なら信用も信頼も出来ると思った。だから花火大会に誘えたんだと思う。本当に歩は良い子だった。アタシは本当に良い友達に恵まれてると思った…。

待ち合わせ時間

次の日、香奈とマックでご飯を食べてた。

『奈美ゴメンね！一緒に行けなくって。あとアタシたぶん…バイトなくって一緒に行ってもダメな気がするんだよね』

『エッ？何が？アタシは香奈が一緒でもダメとか思わないよ』

『うん。アタシさっ！たぶん慣れた男の子じゃないと話せないからサッ』

あゝ。そうゆうことね！確かに香奈は明るいケドどんな男の子とも話すイメージは無かった。

『そんなの気にしなくって良いのに！アタシもメールとかするケド学校じゃあんま話さないよ！（笑）同じ』

『あはは！大丈夫だよ。奈美は一応メールとかしてるし戸川君が頑張るハズ！花火大会の結果聞かせてね！』

『うん！帰ったら即効ツツ連絡するから』

とうとう花火大会マデあと少しとなった…。

アナタから夜、メールが入った。相変わらずドキドキしてしまうアタシ…。何も進歩してないなあ。。。

『ナツチャン！花火大会、一緒に行く人決まった？』

『うん。歩が一緒に行ってくれるって！』

『歩サンかぁ。あの子なら誰とでも気がねなく話せそうだね！良かった』

エッ？やっぱ戸川君は、そうゆう子が好きなのかな…。嫌だ また自分の汚い部分が溢れてくる。言わなくて良い事も言ってしまう。

『戸川君、もしかして歩狙いだったりして！それなら、そうって言うてくれたら良かったのに…』

あつ…送っちゃった。返事が怖い。どうしよう このまま電源切っちゃおっかな…。

でも直ぐさま返事がきた。アタシは恐る恐るメールをみた。

『違うよ！そんなんじゃないよ！俺、女の子と話すの苦手だから、そうゆう子なら安心して意味』

『そうなの？別に隠さなくっても良いのに』

『本当に違うよ。俺、ナツチャンが居ればスゴい楽しいし』

ずるい…またそうやって不意打ちするし…。顔が熱すぎてヤバイ。。でもね あんまりサラッて、そうゆう事を言われると素直じゃないアタシはアナタにとって、こうゆう言葉は、ごく自然なもので特別な意味を持たないんじゃないかって思ってしまうんだ…。

『戸川君…アタシを買いかぶり過ぎデス！何もあげないよ』

『あはは！そんなんじゃ無いよ！あとサツ当日なんだケド凄い混むから朝から場所取りしない？』

『エッ？朝って花火は夜からだよ？夕方からじゃダメなの？』

『横浜メツチャ混むんだ！だから朝、場所取りして取ったらブラっこうよ！それにせっかくだったなら良い場所で見たいじゃん』

『何時くらい？』

『向こうに9時に着きたいから8時くらいに待ち合わせて行こう』

めちゃくちゃ早いんですケド！何か笑えてくるし…。

『まあいいかつ！せっかくだしね』

『じゃ、そうゆう事で！楽しみにしてるから』

そんな朝からアナタと居てアタシは肉体的にも精神的にも持つのか心配デス。。でも、スゴい楽しみだな…。

花火大会当日

とうとう…きちゃった！花火大会当日。昨日は全く以て寝れなかった。服とか超ー悩んだ。あんまオシャレじゃないケド頑張ったつもり…。

携帯が鳴った！

『ナツチャン？待ち合わせって公園の入り口だよな？今、どこ？』

ゲッ ヤバイ…。鈴木からの電話だった！同じ団地だから一緒に行こうとアタシが誘ったんだった。

『あつ、今行く！すぐ下だから！』

ダッシュで降りて目の前は公園…手を振りながら鈴木は待ってた。

『花火大会楽しみだねえ！でも俺、朝弱いから眠い…』（笑）

『うん。アタシも！戸川君のパワーがスゴクって根負けしちゃった』（笑）

『そだね。戸川君、ツツ走ったら止まんないもん！俺いつも振り回されてるよ〜』

『そうなの？意外！アタシ、鈴木と戸川君がそんなに仲良いつて思わなかったんだケド！』

そんなこんなで待ち合わせの駅に着いた…。

戸川君が居た…。マジうける。メツチャ手を振ってるし。。。調子が狂う。戸川君 アナタはスゴク格好いい人なのに今は、スゴク可愛い人だよ?!目が離せない。アナタの目にもアタシは可愛く映ったりしますか?……。そんな訳ないか。

『ナツチャーン!こつちだよ!』

『ゴメン!早いね!待った?』

『全然平気だよ!あとは歩サンだけだね』

『歩1つ前の駅だから、そのまま乗ってくるからホームでって言うてたよ』

『じゃ行こうか』

ホームには歩の姿があった。

『歩い!』

『奈美ツツ!あつ。こんにちわ!高橋歩です。二人の事は奈美から聞いているから大丈夫!今日はヨロシクね!』

さすが歩!サバサバした感じで気持ちが良い!もう溶け込んでる感じ。歩のおかげで楽しく過ごせるかも!

『じゃナツチャン行こうか!』

『うん』

『ねえアタシ達も居るんだだけ？』

『歩ッッ何、言ってるの?! みんなに言ってるんだよ!』

『そうだよ! 歩サン! じゃ鈴木も行こうぜ』

最近の戸川君はアタシの前だと慣れた感じだったケドやつぱりあまり知らない歩の前だと女の子とあまり話さない? 話せない? アナタになって慌てた。

横浜、山下公園に着いて、結構く人が居てビックリした。でも良い席がとれた。

『時間もカナリあるし街をブラブラしようよ』

戸川君が言った。すかさず歩が。。

『良いねえー。奈美そうしよう!』

『だね。鈴木アンタも気を利かせないとモテないよ』

『ガーン。ナツチャンそれは言わない約束じゃん!』

『ナツチャンって鈴木に強いよね!』 (笑)

『エッ? アタシ誰に対しても結構く強いよお』

『うんうん！奈美は実は性格ハードだったりするんだよ』

『そつだよ。ナツチャンは優しいケド結構く強いんだよ！俺はちっちゃい頃から怒られてたんだ』

戸川君はビックリしつつ口を開いた。

『いいなあー。俺そんなナツチャン知らない…』

そして何だか不貞腐れた感じになっちゃった…。

男の子って難しい。

中華街に来て戸川君がカラオケに行こうって言った。

花火大会当日（後書き）

だいぶ遅くなってスイマセンでした。これからもヨロシクお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5447a/>

スゴク好きだった…。

2011年1月28日05時42分発行